



学校教育ビジョン

【学校教育目標】

「自分も人も大切にできる きんひがの子」

～夢をもち、心豊かに、自ら学び行動できる児童の育成を目指して～

1. 教育活動に関する重点努力事項

- ① 確かな学力、豊かな心、健やかな体の育成
～知・徳・体のバランスのとれた児童の育成～
- ② どの子どもも安全・安心に学べる学校づくり

2. 学校経営に関する重点努力事項

- ① 組織的な学校運営
- ② 教職員がやりがいを感じながら、生き生きと働ける学校づくり

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果 (中間)	判定結果 (最終)	今後の改善策
①教育課程・ 学習指導	「子どもに委ねる授業」に 取り組む。	・教育課程の工夫(カリキュラムマネジメント) に取り組む、「子どもに委ねる授業」の実現を めざす。 ・BE THE PLAYERプランの計画・実行。 ・児童自身が「自分で」「自分から」取り組む意 識を育てるために、学習集会や振り返りなどの 機会を設ける。	教務主任 研究主任	言われたことには、素直に取り組むこと ができる児童が多い。一人一人が「自分 で」「自分から」学習に向けて方法を選 んだり、進んで取り組んだりすることに 課題がある。	【成果指標】 毎月の職員の手立て取組チェッ クシートに○をつけ、各自で取組 を振り返り、意識を高める。○の 割合80%以上を目指す。	「子どもにとって委ねる授業」の実現に向 けて取り組んだ教職員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	教職員取組チェック シートを毎月行い、 チェックする。	A	A	毎月のチェックシートでは、すべての職員が「子どもにとって委ねる授業」に向けて取り組んでいた。研究と連携してゴールの姿に 向けた単元計画の具体を共有し、単元内で委ねる場面を増やせるようにした。また、児童が学習を自分のものと考えて取り組む意 識を育てるために学習レベルアップや授業交流にも取り組んだ。3学期は、「〇年〇学期」として、次学年に向けて意識を高める。今 後はさらに「自分から」取り組んだり、「学習の質を上げる」「委ねる場面を増やす」ことを進めていく。
②生徒指導 ※いじめの未 然防止	児童を主とした「自分もみ んなも楽しい学校」づくり を支える。	企画委員を軸として、「自分もみんなも楽 しい学校」にするためにどうすればよい か、児童に考えさせる。各月の生活目標 をもとに委員会全体で達成するための行 事を企画する。	生活健康部	素直で真面目な児童が多く、先生に言われ たことはできるが、自分から行動を起こす児 童はほとんどいない。自分たちで学校を良く しようとする意識を高め、自分たちで考えて 主体的に行動させていく。	【満足度指標】 児童アンケートを行い、「自 分もみんなも楽しい学校」づ くりに力を入れたかどうかを振 り返らせる。	「自分もみんなも楽しい学校」づくりに進ん で取り組んだという児童の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1学期末と2学期末 に児童を対象にアン ケートを行う。	B	C	「みんなが楽しい学校にするために、あなたががんばっていることはありますか?」に「ある」と答えた児童は前期が97.7%で後期は 70%だった。後期は企画委員を中心とした挨拶イベントを行い、全校の挨拶への意識を高めることができた。しかし、割合の減少が 見られたのは、児童の中で「あいさつ」と「楽しい学校づくり」が結びついていないからではないかと考えられる。3学期には「楽しい 学校とはどのような学校か?」「達成するためにどのようなことが必要か?」を各委員会でも話し合った。各委員会からは、「みんな 仲良く」「イベントが多い」「助け合い」「差別のない」などのキーワードが挙がった。自分もみんなも楽しい学校を作るために、各委 員会・各学年が本当に必要なものを考えながら主体的に取り組めるように声掛けや価値づけを行う。
	いじめや不登校の未然防 止のため、生徒指導の4 つの視点を生かした授業 に取り組む。	生徒指導の4つの視点を生かした授業づ くりに取り組む。チェックシートを活用し、 具体的な声掛けや、働きかけの方法を示 す。必要に応じて児童アンケートを取り、 児童の実態に即した取り組みになるよう にする。	生徒指導主事	毎月のチェックシートでは、自己決定の 場の提供、自己存在の感受の達成率 がどちらも84%で、内容を見ると、「思 考過程をノートに残す」「どの場面でも の子どもの意見を活かすか考えておい た」という項目が低かった。	【努力指標】 毎月チェックシートに○をつけ、 各自で自分の取組を振り返り、 意識を高める。学期に一度、児 童の実態に即しているか見直 し、必要に応じてシートを改善し ながら取り組む。	児童の実態を把握しながら生徒指導の4 つの視点を意識した授業に取り組んだ教 職員の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	教職員にアンケート を行う。	A	A	毎月のチェックシートを活用し、全ての教職員が児童の実態を把握しながら生徒指導の4つの視点を意識した授業に取り組むことが できた。しかし、チェックシートの項目数が多く、それぞれの教職員が全ての項目を意識して授業を行えたとは言えない。今後は、4つ の視点の一つに焦点化し、より意識して授業をしていく必要がある。本校の課題である「児童同士の横のつながり」に着目し、「Ⅲ、 共感的な人間関係」に焦点化してチェックシートを作成し、全教員で取り組んでいく。
③キャリア教育・ 進路指導	目標をもって生きようと し、自分の成長を振り返る ことができる児童を育て る。	1年間を通して核となる授業や学校行事 を通して、自身のキャリア形成について 考える機会を学期に2回以上設ける。	学習指導部	教職員が児童の1年間の成長度合いを見る 機会があまりなかった。 児童においては、自分の課題を見つたり、 目標に向かって粘り強くやり遂げたりする ことに弱さを感じる。	【満足度指標】 キャリアパスポートでの振 り返りを通して、自分の成長に 気づかせる。	「授業や行事で、目標を達成するために頑 張ることができた」「よくできた」と答 えた児童の割合が、 A 90%である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1学期末と2学期末 にキャリアパスポー トで振り返りをさせ る。	A	A	キャリアパスポートで「目標を達成するために頑張ることができた」「よくできた」と答えた児童は65.4%だった。また「できた」と答 えた児童の割合と合わせると93.8%だった。前期と同じく「できなかった」と答えた児童はほとんどいなかったが、「よくできた」と答えた児 童の割合がほとんど変わらなかった。また、目標に前向きに取り組んでいるが、目標に対しての自己評価が難しい場合が考えられ る。「よくできた」の割合を増やすために、目標を具体的に立てられるように指導し、目標に向けて頑張っている姿やできていたこと については継続して価値づけしていく。
④保健管理	メディア・コントロールや、 メディアを使用する際の姿 勢改善への意識向上に向 けた指導の充実を図る。	・年に3回メディア・コントロール週間を 実施し各学級で実態に応じた事前指導を する。 ・メディア使用と心身の健康の関係につ いて、関心や危機感をもてるよう児童・保 護者へ働きかける。	保健主事	昨年度までの取組により、多くの児童がメディアの長時間 使用が体に悪くあることを理解しメディア・コントロール 週間中に実践できる児童の割合は増えてきているが、普段 からの継続が難しい児童が多い。平日2時間以上メディア 使用…昨年度1学期末は59%、2学期末は54%	【成果指標】 健康に留意しながら、メ ディアを使用することができ る児童の割合80%以上を目 指す。	「健康に気をつけてメディアを使用するこ とができた」と答えた児童の割合が、 A 80%以上である B 75%以上である C 70%以上である D 70%未満である	6月と12月のメ ディア・コントロール週間 後にアンケート調査 を行う。	A	D	前期82%だったのが、後期の結果は67.4%と児童の意識の低下が見られた。また、メディア・コントロール週間中に校内で目安として 提示している「平日は1日1時間まで、土日は2時間まで」について実践できた割合は学校全体で前期43%から後期39.6%とこち ろも低下しており、メディア・コントロール実践の難しさを感じている。家庭での保護者との連携が不可欠のため引き続き健康啓発を 行っていく。来年度は提示している時間については厳格に、毎週行っている健康調べの項目にもメディアの時間を入れ、児童が日 ごころから意識できるようにする。また、目標をシンプルでわかりやすく校内で実践できるものに変えていくことで、共通実践を回り児童 の健康行動の定着を目指す。
	児童の発達段階に応じ て、柔軟性の向上を目 指す。	・全学年共通の準備運動として、スト レッチや体幹トレーニングに取り組み させる。 ・縦割り活動や委員会活動のイベン トを通して、楽しみながら運動する場 を設定する。	生活健康部	昨年度の新体力テストで、柔軟性の項目 において県平均に達している児童が1 9%しかいない。	【成果指標】 柔軟性の項目において、 県平均に達する児童の割 合が40%以上を目 指す。	新体力テストにおいて、柔軟性の項目で、 県平均に達している児童が、 A 40%以上である。 B 30%以上である。 C 20%以上である。 D 20%以下である。	・5月に1回目の計 測を実施する。10 月～11月の間に計 測を実施する。 ・全校で取り組む。	A	A	新体力テストでの柔軟性の項目で県平均に達している児童の割合は、全体の達成率としては56%であった。ただし、各学年の平 均を見ると、4年男子73%、5年男子89%、6年男子26%、4年女子33%、5年女子64%、6年女子50%と各学年で男女の達 成率にバラつきが見られる。そのため、来年度は特定の学年だけではなく全校の柔軟性が向上することを目指していく。今年度は 1年間を通して全校の体育の授業でストレッチに取り組んだ。来年度は、1～3年生も記録をとり、全校で柔軟性の向上に取り組 む。具体的には、前期・後期の年2回記録を測定し、児童自身が柔軟性の向上を感じることができるようになる。また、全校児童の 基礎体力の向上に向けて、校内に運動コーナ―を設け、日常的に体を動かすことができるような環境を作っていく。
⑤安全管理	自分の命は、自分で守る ことができるよう、いざとい う時には自ら考え判断し て行動する児童を育て る。	各学期に1回以上、避難訓練を実施し、 適切な経験を積み重ねる。	教頭 安全教育 担当	避難訓練の際、指示に従うことはでき るが、自分で考え正しい行動をとることが 難しい児童が見られる。	【満足度指標】 自分の命を守るためにどし たらいのかを自分で考え 行動できた。	自分で考え適切な行動ができた児童が A 95%以上である。 B 90%以上である。 C 85%以上である。 D 80%未満である。	避難訓練後、児童に 振り返りのアンケ ートを行う。	A	A	「火事が起きた場所」「火事や地震の際の避難場所」については、ほぼ100%の児童が、放送を聞いて把握できていた。「静かに 放送を聞くことができた」児童、「騒いだりあわてたりせずに落ち着いて避難できた」児童は、一学期の火事の際は全員だったが、2 学期の地震避難訓練では、それぞれ97%（できなかったと答えた児童が5人）、95%（できなかったと答えた児童が7人）であ った。地震の避難訓練は、休み時間であったこともその理由だとは思われる。しかし、この「できなかった」と答えた児童が全員4年生 以上の高学年児童だということを考えると、真剣に取り組む姿勢について指導していく必要がある。
⑥特別支援教 育	個々の児童の特性を理解 し、必要な支援を行いな がら、多様なあり方を児童 らが認め合えるように働き かける。	・支援を要する児童について個別の記録 をこまめに残す。 ・専門家を招いての、校内研修会を持ち、 児童の特性への理解を深める。 ・児童が、特性を持つ友達を温かく、当 たり前に受け入れる環境づくりに努める。	特別支援 教育コー ディネー ター	・どの学級にも特性があり、個別の支援を要する児童 が在籍している。 ・学級で困難の強い児童については、校内支援 委員会を持ち、専門相談や医療につなげている。 ・今年度は特別支援学級に在籍する児童が増え た。	【努力指標】 研修会や児童理解の会を持 ち、支援の方法について全 職員で検討して共有し、児 童の支援に生かすことが できる。	多様な特性や相互理解を深める方法につ いて学び、児童の支援に生かすことが できたと感じた職員が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	教職員にアンケート をとり意識調査を 行う。	A	A	月末の打ち合わせの会の後の児童理解の会は十分な時間が取れた。全員が情報を共有できるので、異学年の対応がすぐで きる。校内支援委員会や専門相談、特別支援アドバイザーの参観後の懇談で具体的な支援の仕方を考えることができ、実践してい る。また、特別支援学級の児童については、市教委や関係者との情報共有の場を設け、日々の支援に生かしている。また、保護 者も一緒に専門相談員からの指導を受けている。カウンセリングの先生には、冬休みに教職員との学習会、3学期には5年生の児 童を対象に「心の健康」に関する授業に入っていた予定である。
⑦組織運営・ 業務改善	明るく元気に児童と向き 合うことのできる心身とも に健康な教職員の姿を目 指す。	業務の見直しを進め、精選と合理化を行 う等の工夫をし、自らの働き方について 考える。また、連携・協同を進めることで、 業務改善に努める。	教頭	業務の精選、合理化連携を感じている 教職員は、63.3%であった。ますます忙 しなっていると感じている教職員が多 かった。	【満足度指標】 業務の精選(削減)、合理 化、分掌内での連携を工 夫しながら進め、業務改善 を行う。	自らの働き方を考え、工夫して改善を行 っていると考えた教職員が A 95%以上である B 85%以上である C 75%以上である D 75%未満である	教職員にアンケート を行う。	D	D	工夫・改善して業務を行っている職員は、1学期71.4%、2学期64.3%であった。見直しを持ち、優先順位を考えたり、本当に必要な ことが考え見直しをして工夫しているが、改善できていないと感じている。業務分掌の議案作りや生徒指導案件での対応に多く時 間をとられるとの声があがった。そもそも業務が多岐にわたって多くあるとの意見も見られた。保護者や地域の理解を得ながら、笑 顔で児童に向き合う時間を増やすために業務改善を進める。
⑧研修	国語科を中心に授業改善 を図り、研究主題である 「自ら課題を見つけ、主体 的に学ぶ子の育成」を目 指す。	国語科「読む」単元を主として、単元デザ インシートを活用することで、学習指導要 領をもとに付けたい力、単元末の児童の 姿、言語活動、子どもに学びを委ねる時 間を設定するなど、児童が自律した学び 手となるよう授業を構築する力を付ける。	研究主任	研究初年度ということで、国語科の授業のつ くり方が共有されていないため、単元デザ インシートを活用して全職員が共通実践を進 める中で授業改善を図っていくことが必要で ある。	【満足度指標】 「自分から課題やめあてに 向かい、主体的に学習に取 組んだ」かどうかを児童に 振り返らせる。	自ら課題を見つけ、主体的に学ぼう としている児童が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1学期末と2学期末 に児童を対象にアン ケートを行う。	B	B	児童アンケートの結果、自ら課題を見つけ、主体的に学ぼうとしている児童の割合は88.7%であった(そう思う:42.6%、どちら かといえばそう思う:46.1%)。国語科においてプレイヤープランを活用して単元を見通した授業を行うとともに、読むこと単元にお いて単元デザインシートを作成し、言語活動と付けたい力をつなげている。プレイヤープランの活用も進み、児童が学習をふり返 たり、次の時間に向けて課題を意識したりしながら学習を進めることができた。ただ、ふり返りの内容に深まりがないので、書き方 やよいふり返りを紹介するなど、ふり返りの質の向上を意識させていく必要がある。
⑨保護者、地 域との連携	学校と地域(家庭)が目標 を共有し、連携・協働しな がら、児童の学びや成長 を支える。	コミュニティスクールの活動を実働化さ せ、保護者や地域の方に教育活動に参 画してもらう。	教頭	家庭や地域と連携した授業や活動の平均回 数は、4.5回であった。総合や道徳の授業等 でゲストティーチャーをよんだり、一緒に活動 したりした。	【努力指標】 家庭や地域との連携によ る授業や活動を、年4回以上 行う。	連携した授業や活動が各学年 A 年5回以上できた。 B 年4回以上できた。 C 年3回以上できた。 D 年2回以下であった。	回数のチェックを行 う。	C	B	各学年の平均は、4回であった。大型寺史跡巡り、昔生活体験などの「お宝探検クラブ」での授業や教育講演会「防災について」の 授業を入れると、5回以上になる。また、「朝の読み聞かせ」やきんひが祭りで「ひがりんピック」は、授業ではないが、保護者の おかげで良い活動となった。来年度も、道徳や地域授業でゲストティーチャーをおよびしたり、実技教科を中心とした支援者を募 ったりして、児童の豊かな学びや成長を進めていきたい。
⑩教育環境整 備	児童が安全に、また、教 職員が効果的・効率的に 教育活動を行うことが できる環境を整える。	全教職員による備品・教材整備を計画的 に行い、校内を整理整頓する。	教頭	昨年度、一昨年度と備品や教材の整理整 頓、廃棄を行ってきた。かなり使いやすくな ったが、壊れた備品や教具、使用しない教材 が、まだ準備室や空き教室に残っている。	【努力指標】 全教職員で定期的に備品・ 教材の整理整頓を行う。	全教職員で備品・教材の整備を年間 A 3回以上実施した B 2回実施した C 1回実施した D 実施しなかった	実施状況を確認す る。	C	A	全体的な整備は、1学期(夏季休業中)1回、2学期(冬季休業中)1回、3学期(春季休業中)1回(予定)、計3回行った。また、今 年度はPCRルームをリフォーム(「学び空間デザイン」)したので、室内デザインを考え、机やイスを移動したり不要物の廃棄をした。 計画的な整備により、効果的な教育活動を行うことができた。
学校運営委員 会での評価、 助言	〈中間〉 ・教科書にQRコードが付いている時代になった。学び方も変わってきたのでは。どんな授業をしているか。…もう一度復習したいところ、先取り学習を 行いたいところ等、一人でQRコードから動画で学ぶこともしている。市がすすめている「自由進度学習」を実践している。 ・教職員の業務改善が行われていないようだが、…連携や分担で標準化し、工夫して改善していく。 ・朝の登校時、元気がない児童が多いように思う。スマホやタブレットの影響ではないか。コミュニケーションも上手くない。下校時は、元気なので心配し ていない。…学校でも朝は元気がない。夜更かししている児童が多いようだ。家庭と連携していく。	〈期末〉 ・項目②「自分もみんなも楽しい学校づくりに進んで取り組んだか」の達成度が低い点が気になる。「どうしたら楽しくなるか。」をまず児童に聞いてみてはどうか。ゲームやYouTubeの方が楽しいだろうが、行く のが楽しい学校づくりに一層取り組んでほしい。 ・項目④「メディアコントロール」達成度は、中間はAだったのに、最終ではDとなったのは、なぜか。メディアに関する講演会(学校保健委員会)を6月に行い、意識が高まったいたからではないか。学校の指導 だけでは難しいのでは。親の背中を子どもは見ている。親としてできることをやっているとやっていると聞かせる、パスワードをかける等。 長時間のメディアの使用は、睡眠不足、視力の低下につながる。「早寝早起き朝ごはん」の習慣を各家庭で実践していくことが大切だと思う。 ・「BE THE PLAYER」子どもに委ねる授業の成果は?学習の参加度が高まった。まだ課題は残っているようなので、改善に向けた取り組みを進めていってほしい。								